見上潤：　バルトークの音楽語法　―バルトーク《弦楽四重奏曲第 4 番》(1928)第 1 楽章の場合―

川本氏とのコラボ発表は今回で 4 回目。昨年から、ベルク、ヴェーベルン、シェーンベルクと新ヴィーン楽派の御三家をめぐり、今回はバルトークというお題をいただいた。

バルトークの作曲技法に関しては、ハンガリーの音楽学者レンドヴァイ・エルネー(1925-1993)の研究が詳しい。これを簡潔にまとめた柴田南雄(1916-1996)よれば、両大戦間にバルトークが採用した語法は以下 4 点とされてきた。

1. 黄金分割の理論を形式に応用。
2. 黄金分割の理論を垂直の音程関係への応用。
3. 倍音列音階。
4. 機能転移（＝中心軸システム）。

しかしながら、実際にはこれらの技法が必ずしもすべての作品に使われていないことに加え、作曲家自身によるスケッチなどが発見されていないことから、その妥当性には疑義が生じている。さらに近年の研究では、むしろバルトーク以外の作曲家の作品に上記の技法が発見されることから、もはやバルトーク独自の作曲技法とさえも言い難い。したがって、レンドヴァイの主張はとりあえず保留して、あらためて作品それ自体を様々な観点から分析し直す必要性がある。

本発表は、《弦楽四重奏曲第 4 番》(1928)第 1 楽章に対象を限定し、上記の問題意識の下、この作品の分析結果の報告を行い、以下の問題を提起する。

1. 全 161 小節の全体構造は、主題の模倣や動機展開が存在し、2 つの主題の提示と再現があるが、これはソナタ形式なのか？
2. 半音および全音によるトーン・クラスターの多用は、ヘンリー・カウエル(1897-1965)の影響か？
3. 5 音音階の部分小単位であるトリコルドの多用は、民謡の影響か？
4. 複雑に錯綜するオスティナートが多声で絡み合うテクスチャーは、1960 年代にアメリカで始まったとされるミニマル・ミュージックの先駆か？
5.「楽曲とは 1 個の主和音のゆれである」とする島岡譲のゆれ理論を適用は可能か？